

# きたすま

自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、  
わたしにふさわしくない (マタイ 10・38)

No.205 (8月号)

2020年 7月 26日発行  
発行 カトリック北須磨教会  
〒654-0151  
神戸市須磨区北落合2-3-1  
発行人 高橋 聡  
編集 広報委員会

## 故郷巡り

中川 明

自粛生活が長くなり気持ちまで減入り、困りました。色々工夫したのですが、そのひとつが「故郷巡り」でした。

明石が故郷ですが、中学から神戸の学校に通ったので、地元・明石の思い出は小学校までで、もう50年以上前のことで、記憶はとても淡くなっています。この地元を歩くのです。小学校への通学路にある天神さん、校門までの急な上り坂、そして、小学校。あるいは、何かの折に家族でよく訪ねた神社など、風景は大きく変わったけれど、道はそのまま、この道を踏みしめるのは50年ぶりだなと思いたから歩いていると、色々なことを思い出します。それは、やはり親のことで、親を泣かせたとの想いか、色々な思い出と絡み合って湧いてきて、親の私への想いの深さが有難く、切ないのです。親の気持ちは、私を知る以上に、深く尊いものだ、旨が痛みます。

小さな古い散髪屋があり、小学校の同級生の店です。前から気になっていて、先日、思い切って訪ねたら、半世紀の時間が

逆回りして、散髪しながらのとてもよい時間でした。

髪が伸び、そろそろ散髪の時期、彼1店にまた行こうと思っ  
ています。



すべてのいのちを守るため

——平和は希望の道のり——

日本の教会の兄弟姉妹とすべての善意ある人々へ

日本のカトリック司教団は、戦後 50 年に『平和への決意』、60 年に『非暴力による平和への道——今こそ預言者としての役割を』、そして 70 年に『平和を実現する人は幸い——今こそ武器によらない平和を』と、その時々国内外の情勢に鑑みながら平和メッセージを発表しました。

2019 年の教皇フランシスコ訪日から明けた今年も、太平洋戦争での沖縄戦、広島・長崎の被爆、戦争の終結、そして国際連合創設 75 周年です。世界は今、新冷戦、東アジアの不安定な情勢、核の脅威、地球環境の危機などが予断をゆるさない状況にあります。

本日、わたしたち司教団は、沖縄慰霊の日の平和巡礼への参加を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止せざるをえませんでした。しかし、心は常に沖縄の人々とともにありたいと願っています。沖縄に建つ戦争犠牲者に対する慰霊と不戦の誓いの原点である魂魄の塔に想いを馳せ、平和についてのわたしたちの考えを述べ、これからの行動指針としたいと思います。

### 1. 魂魄の塔に思いを馳せる

終戦の年、沖縄は本土決戦を一日でも遅らせるための「捨石」とされ、住民を巻き込んだ悲惨な地上戦が繰り広げられました。歴史上、最も凄惨な戦闘と言われるこの沖縄戦では、日米両軍が我が物顔でこの小さな島のありとあらゆるものに対し、蹂躪の限りを尽くしました。鉄の暴風ともよばれる激烈な戦闘の後には、戦争犠牲者の遺骨が累々と野ざらしにされていました。この遺骨を住民たちが自らの手によって集め、慰霊碑を建て、祈りの場としました。

この「魂魄の塔」は、数ある慰霊碑の中でも特別な意味を持っています。元々は住民自らの手によってなされた遺骨収集による骨塚でした。それが、やがて沖縄の人々の戦争犠牲者に対する慰霊の原点と見なされるようになり、さらに、名もないごく普通の人々の反戦平和への希求の原点、不戦の誓いの原点ともなっているのです。

沖縄県平和祈念資料館の出口に、「むすびのことば」として次のように刻まれています。

(略) 戦争をおこすのは たしかに 人間です しかし それ以上に 戦争を許さない努力のできるのも 私たち 人間 ではないでしょうか (略) これが あまりにも大きな代償を払って得た ゆずることのできない 私たちの信条なのです

戦争、基地、軍備増強に反対する沖縄の人々の切実な叫びは、「戦争というものはこれほど残忍で これほど恥辱にまみれたものはないと思う」に至った沖縄戦の体験からきているのです。しかし、こうした沖縄県民の信条の訴えにもかかわらず、この沖縄を「捨石」とした扱いは75年を経てもなお、その自己決定権を無視するという事実をもって脈々と続けられています。

あらゆる戦争を憎み、命を大切にしようとする沖縄県民の訴えに応え、今日、「魂魄の塔」に思いを馳せて、すべての戦争犠牲者のために祈りを捧げつつ、平和希求への決意を新たに、行動を起こしましょう。

人のいのちは何ものにも替えがたいとする沖縄の「ヌチドゥ宝」の心と、「すべてのいのちを守るため」という教皇フランシスコ訪日のテーマは重なっています。「いのちと美に満ちているこの世界は、何よりも、わたしたちに先立って存在される創造主からの、すばらしい贈り物」です。「『わたしたちが、自分たち自身のいのちを真に気遣い、自然とのかかわりをも真に気遣うことは、友愛、正義、他者への誠実と不可分の関係にある』（回勅『ラウダート・シ』70) のです」。それゆえ、戦争だけは、どんな理由があっても絶対に起こしてはなりません。わたしたちキリスト者は、こうした沖縄の人々の叫びと教皇フランシスコの言葉に共鳴し、戦争放棄と恒久平和を訴えます。「すべての人との平和」こそ、神の望みだからです。

## 2. カトリック教会の非暴力による平和への立場

聖ヨハネ・パウロ二世教皇は39年前（1981年2月）広島で、次のような力強いメッセージを述べました。

「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。……過去をふり返ることは、将来に対する責任を担うことです。……人類同胞に向かって、軍備縮小とすべての核兵器の破棄とを約束しようではありませんか。」

このアピールに応じて、日本の司教団は、翌年、平和について考え、平和のために祈り行動するため「平和旬間」（8月6日～15日）を設け、平和や人権の問題について積極的に発言し始めました。

日本司教団の発言は、2017年「世界平和の日」の教皇メッセージと重なります。教皇は、「積極的非暴力」の立場を表明して、「非暴力がわたしたちの決断、わたしたちの人間関係、わたしたちの活動、そしてあらゆる種類の政治の特徴となりますように」と述べています。

またこの立場は、同年8月に教皇が『カトリック教会のカテキズム』の死刑に関する記述を変更し、「死刑は許容できません。それは人格の不可侵性と尊厳への攻撃だからです」（2267）と、死刑廃止の立場を明確にしたことにもつながります。

さらに同年9月20日、パチカンは、核兵器禁止条約に他の2カ国と共に最初に署名・批准し、11月には国際シンポジウム「核兵器のない世界と包括的軍縮の展望」を主催しました。その場で教皇は次のように述べました。「核兵器使用の脅威、またその保有自体も、断固非難されるべきです。……その意味で、被爆者のかたがた、つまり、広島と長崎の爆弾で被害を受けた人々、また核実験による犠牲者の証言は貴重です。そのかたがたの預言的訴えが、とりわけ若い世代にとって、警告となるはずで  
す」。「核抑止論」については、聖ヨハネ23世教皇がすでに回勅『地上の平和』（1963年）の中で次のように述べています。「軍備の均衡が平和の条件であるという理解を、真の平和は相互の信頼の上にしか構築できないという原則に置き換える必要があります。わたしは、これが到達可能な目標であることを主張します」（60）。

### 3. 教皇訪日平和メッセージ

昨年11月、教皇フランシスコは、平和の巡礼者として「すさまじい暴力の犠牲となった罪のない人々を思い起こし、現代社会の人々の願いと望みを胸にしつつ、じっと祈るため」、長崎と広島を訪れました。教皇は、誰よりも平和を希求する高齢化した被爆者たち、「平和のために自らを犠牲にする若者たちの願いと望み」、「いつの時代も、憎しみと対立の無防備な犠牲者」である「貧しい人たちの叫び」、「声を発しても耳を貸してもらえない人たちの声」、「現代社会が置かれている増大した緊張状態……を、不安と苦悩を抱いて見つめる人々の声」、小さくともつねに軍備拡張競争に反対する声といった、さまざまな声を代弁して世界に訴えました。教皇は誰をもはばからず、平和という究極のモラルに向き合い、特に軍備と核兵器について踏み込んだ強いメッセージを述べました。「軍備拡張競争は、貴重な資源の無駄遣いです。……武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ、日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは天に対する絶え間のないテロ行為です」。「戦争のために原子力を使用することは、……これまで以上に犯罪とされます。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反する犯罪です。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の所有は、それ自体が倫理に反しています」。

そして、教皇はすべての人々に呼びかけます。「核兵器から解放された平和な世界。……この理想を実現するには、すべての人の参加が必要です。個々人、宗教団体、市民社会、核兵器保有国も非保有国も、軍隊も民間も、国際機関もそうです。核兵器の脅威に対しては、一致団結して応じなくてはなりません。」カトリック教会にとって、「民族間、また国家間の平和の実現」に向けて努力することは、「神に対する、そしてこの地上のあらゆる人に対する責務なのです。」教会は、「核兵器禁止条約を含め、核軍縮と核不拡散に関する主要な国際条約に則り、たゆむことなく、迅速に行動し、訴えていきます」。

教皇のこの発言に呼応して、日本カトリック司教協議会は、昨年12月、会長名の文書で、首相宛てに「核兵器禁止条約への署名・批准を求める要請」を行いました。米国カトリック司教協議会国際正義と平和委員会も教皇フランシスコの広島・長崎での発言を支持し、「米国は非核化・軍縮の先頭に立つべきである」と政府に働きかけていくとの声明を発表しました。またカナダとドイツの司教団は、すでに昨年、パチカンの核兵器廃絶方針を支持する声明を出していましたが、最近の教皇の姿勢に促されて、核抑止政策に甘んじてきた態度を改めると表明しています。

#### 4. 平和は希望の道のり

今年は、朝鮮戦争開戦70周年でもあります。同じ民族が戦うという悲劇も、35年に及んだ日本による朝鮮統治政策と無関係ではありません。朝鮮戦争は今なお禍根を残し、日本を含む東アジアは冷戦体制を引きずり、大国の利害の狭間で戦争の火種を抱えており、平和への進展が不透明のままです。東アジアの平和構築にいかに関与していくかは、わたしたち日本の教会が教皇フランシスコの言葉に従うことができるか否かを明らかにする試金石だといえましょう。そのためにもわたしたちはこうした過去としっかりと向き合い、将来に対する責任を担い続ける決意を新たにします。

教皇は今年の「世界平和の日」メッセージで、平和への歩みは「障害や試練に直面する中で歩む希望の道のり」、つまり、「真理と正義を求め、犠牲者の記憶を尊重し、報復よりもはるかに強い共通の希望に向けて一步ずつ切り開いていくという、忍耐力を要する作業」と述べました。そして、「たとえ克服できそうもない障害に直面しても、わたしたちを踏み出させ、前に進む翼を与えてくれる」希望の徳をもって、「神という共通の源に根差した、対話と相互信頼のうちに実践される真の兄弟愛を追い求めなければなりません。平和への願いは、人間の心に深く刻まれています」と、平和を実現するために、希望の翼を広げるよう促しました。パウロが、「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい」（コロサイ3・15）と勧めているとおりです。

激戦地、安里に建つ教会に集う方々、および各地の共同体と心をひとつにして、神に願い求めます。教皇フランシスコの日本訪問によってわたしたちがいただいた平和への意志と希望に、イエス・キリストの復活のいのちと聖霊の息吹が豊かに注がれますように。

2020年6月23日  
日本カトリック司教団

教区・地区の主要な動き

- 4/14 ヨゼフ・アベイヤ補佐司教  
福岡教区司教に (5/17 着座)  
司教総代理：酒井俊弘補佐司教  
事務局 長：赤波江 豊神父 に
- 6/1 地区長、委員長任命 (詳細は掲示を)  
神戸地区長 Fr.アルフレド・セゴビア
- 「カテキズムによる信仰養成連続講座」  
ユーチューブ配信始まる (5/30～)
- 2020 九州豪雨災害 支援募金始まる  
郵便振替：01760-6-20729  
カトリック福岡司教区「2020 九州豪雨」

8月のミサ割当表 (いずれも10時)

地区	ミサ開催日	
1・4	7月26日	8月16日
2・5	8月2日	8月23日
3・6B・7	8月9日	8月30日
6A	8月15日(土) 聖母被昇天	9月6日

社会活動委員会より

1981年2月、「平和の使者」として、教皇ヨハネ・パウロ二世が広島に来られ、「平和のメッセージ」を発信されました。それを受けて、日本の教会は翌年の8月6～15日を「日本カトリック平和旬間の日」と定められたそうです。

今年は集まって何かをすることは出来ませんが、ひとり又ご家族で、それぞれの場所で、それぞれの時間にお祈りしたり、本を読んだり、いつか「平和」について考えてみませんか？

いくつかのお祈りをコピーして、御聖堂入り口のレターボックス前に置いています。ご自由にお持ち帰り、お役立て下さい。

◎今年度の「クリスマスチャリティコンサート」「シナピス学習会」は中止になりました。

カトリック北須磨教会ホームページ <http://cathkitasuma.web.fc2.com>

大阪大司教区ホームページ [www.osaka.catholic.jp/index.html](http://www.osaka.catholic.jp/index.html)

編集後記

ミサは再開されましたが4週に1回ではなかなか皆さんとお会いできず、共同体の交わりが回復出来たとまでは感じられません。一方、感染者は再び増加の傾向。一堂に会する機会のないまま、私たちはどのように兄弟の交わりを保っていけばよいのでしょうか？

平和旬間の行事も特に計画されていないようです。戦後75年の節目に寂しいことですが、司教団のメッセージを載せさせていただきました。少し長いですがお読みください。コロナ禍の中で増々「すべての命を守る」行動の意味も重要性も大きくなってきているように思います。主よ、この状況の中で被昇天祭、終戦記念日を迎える私たちに知恵をお与えください。(KJH)